琉球大学学術リポジトリ

宮古・八重山諸島先史時代における文化形成の解明：遺跡属性と生態資源利用の地域間比較を通した文化形成の考察

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学
	公開日: 2017-03-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 山極, 海嗣, Yamagiwa, Kaishi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33725

様式第１３号

琉球大学大学院
人文社会科学研究科委員会　殿

博士論文審査委員会
主査　池　田　栄　史　印
副査　山　里　純　一　印
副査　豊見山　和　行　印

学位（博士）論文審査の結果報告書

このたび、博士論文審査委員会として、学位論文の審査を終了しましたので、その結果について、下記の通り報告します。

記

学生番号　１２８０９２K		学生氏名　山　極　海　嗣	
人文社会科学研究科　比較地域文化専攻		主指導教員　池田　栄史 副指導教員　山里　純一　・　豊見山　和行	
成績評価	学位論文	合格　　不合格	
論文題目	宮古・八重山諸島先史時代における文化形成の解明 － 遺跡属性と生態資源利用の地域間比較を通した文化形成の考察 －		
審査要旨	本論文は宮古・八重山諸島の先史文化について、当該期の遺跡の属性（遺跡立地、遺跡の規模・内容、出土遺物（土器・石器・貝製品など））について、資源利用の視点から比較検証することによって両地域の先史文化形成過程を明らかにするとともに、これをアジア・太平洋地域における島嶼地域における先史文化形成過程と比較し、その特性を明らかにすることを試みた論文である。 全７章からなり、第１章で本論の目指すところを述べ、第２章で分析対象と分析方法を提示する。第３章から第５章までの３章で当該地域の先史文化期として設定されている下田原期と無土器期それぞれの内容と両文化期の関係についての検討を行なう。第６章では台湾やフィリピン、太平洋諸島における先史文化と宮古・八重山諸島の先史文化の関係を検証し、第７章において結論を述べる。 宮古・八重山諸島の先史文化については、約4000年前頃に位置付けられる下田原文化と約2500前頃から現れる無土器文化が設定されている。両文化についてはその起源について南方との関係が取り沙汰されているものの、個別遺物の類似性に基づく推論が多かったこともあり、起源の問題を含めてそれぞれの文化内容や両文化の関係については明確にはなされていなかった。 本論文はこの点を指摘した上で、両地域の考古学的調査成果を資源利用の視点から再検討し、両地域の先史文化の形成過程とその特徴について明らかにするとともに、アジア・太平洋地域におけるさまざまな先史文化との関係について考察している。その立論手法、およびその結論には独創性があり、また今後の当該地域の先史文化研究に益するところが多く、充分に評価すべきであると考えられる。 これに基づき、本審査委員会では本論文を博士の学位論文に値すると判断する。		

様式第１４号

琉球大学大学院
人文社会科学研究科委員会　殿

最終試験審査委員会
主査　池　田　栄　史　印
副査　山　里　純　一　印
副査　豊見山　和　行　印

最終試験の結果報告書

このたび、博士論文審査委員会として、最終試験を終了しましたので、その結果について、下記の通り報告します。

記

学生番号　１２８０９２K		学生氏名　山　極　海　嗣	
人文社会科学研究科　比較地域文化専攻		主査　池田　栄史 副査　山里　純一　・　豊見山　和行	
成績評価	最終試験	合格　　不合格	
結果要旨	本学生は博士論文「宮古・八重山諸島先史時代における文化形成の解明－ 遺跡属性と生態資源利用の地域間比較を通した文化形成の考察－ 」を提出し、博士論文審査を終了している。 本論文の特徴は、宮古・八重山諸島の先史文化について、当該期の遺跡の属性（遺跡立地、遺跡の規模・内容、出土遺物（土器・石器・貝製品など））について、資源利用の視点から比較検証することによって、両地域の先史文化形成過程を明らかにするとともに、これをアジア・太平洋地域における島嶼地域における先史文化形成過程と比較し、その特性を明らかにすることを試みた点にある。また、両文化については個別遺物の類似性から台湾やフィリピンの先史文化に起源をもつことが提唱されていたが、これについて台湾・フィリピンを含むアジア・太平洋地域の先史文化内容との比較検討を行ない、その広がりの中に両文化を位置付ける試みを行なっている。 本論文に見られるこれまでに蓄積された考古学的調査成果について新たな視点から分析し、これを踏まえた理解論の構築を進める研究手法、およびその研究成果には独創性がある。 さらに、本論文に関する本審査委員会の質疑応答における当該学生の対応には、研究者としての能力を充分に備えていることがうかがわれる。 これらのことに鑑み、本審査委員会では、当該学生について、最終試験の審査に合格したと判断する。		